

映画のたましいは、時空をこえてゆきかう

ベン シャオリン

中国の彭小蓮が、今は亡き日本の小川紳介の未完の映画を完成

【製作】上山産紅干柿の記録映画を作る会

【出演】木村修一 木村サト 渡辺金

渡辺茂子 渡辺智春 中川トシ子 中川庄太郎

金子福次郎

酒井貞男 今野一

山川大治 山川修身

尾形勝志 佐々木誠市 佐々木喜美子

北沢正男 北沢政子 佐々木寛子

【第1期撮影】小川プロダクション

監督…小川紳介

撮影…田村正毅

現地録音…菊池信之

助監督…飯塚俊男

演出助手…見角貞利

広瀬里美 白木芳弘

撮影助手…野坂治雄 三森葉子

製作…伏屋博雄

【第2期撮影】

監督…彭小蓮

撮影…林良忠(ジョン・リン)

現場制作…尾形充光

現地録音 菊池進平

撮影助手…加藤孝信

通訳…劉含発(リュウ・ファンファ)

【仕上げ】

構成・編集…彭小蓮

編集助手…見角貞利

通訳…劉含発

整音…久保田幸雄

音楽…縄文太鼓

題字…磯田充子

製作協力…安井喜雄

【協力】

上山市 上山観光協会

上山市教育委員会 上山市立図書館

山あまがた 有限会社 笹長食品

南果連共同組合

山形国際コミュニケーション映画祭ネットワーク

【共同製作】プラネット映画資料図書館

【共同製作及び製作事務】白石洋子

第一期撮影1984年、第二期撮影1999年／

16ミリ／カラー／90分／日本語字幕付

雪をかぶった红柿の木

まんざんぺにがき

満山红柿

上山 柿と人とのゆきかい

山形国際ドキュメンタリー映画祭招待作品

監督:小川紳介+彭小蓮

「満山红柿」ホームページ

<http://www4.ocn.ne.jp/~fdh/benigaki/>

まだ若い干し柿の「連」



木村修一・サトさんの柿もぎ取材する小川紳介から第1期スタッフ(1984)

「1000年刻みの日時計 牧野村物語」の風土に実る、红柿の記録

べに がき

『満山紅柿』 小川紳介と彭小蓮

上野昂志



佐々木喜美子さんの話を聞く小川紳介(1984)

小川紳介の声が聞こえる。明るく、メリハリの利いた話し声が響いてくる。その声と、その喋りっぷりに、思わず心が疼き、画面に向かってこちらも話しかけたくなる。これは、しかし、小川紳介を知っているものだけに訪れる、きわめて個人的な感情であろうか。そうかもしれない。そうかもしれないが、といって、そこだけで閉じられるものではないだろう。

映画のなかでは、誰もが生きている。すでに死んだ人も、そこでは元気に話をしている。むしろ、それはドキュメンタリー映画においては、と限定をつけるべきなのかもしれないが、その当然なことが、改めて胸に沁みる。フィルムの中かで、人はその固有の時間を生き続ける。小川紳介は、村の人々が話をする姿を克明に撮り続けることにこだわったが、そのことの意味が改めて胸に落ちる。彼はそうすることで、あの人たち一人一人を、その死後においても生かし続けたのである。ドキュメンタリーとは、人をその個別の生において生かす方法なのだ。

ここでは、誰もが、徹底して具体的なことを具体的に話している。それはたとえば、柿商人の佐々木喜美子さんが、彼女の母の夫(ということは彼女の父のことだが、そうはいわない)が、汽車の事故で亡くなったという話をどのようにしたかを、思い出してみればいい。すべてが、どこで、どのようにして、どうなったかと具体的なのだ。具体的ということは、同時に、個別的ということである。そこに、決して一般化されたり、概念化されたりすることのない個人の生の記憶が息づいているのである。むしろ、それは佐々木喜美子さんばかりではない。ここに登場するすべての人の語りがそうなのだ。これは、しかし、驚くべきことではあるまいか。もし、そうでないと思う人がいたら、テレビのスイッチを入れて、そこで語られている言葉に耳を傾けてみればいい。ここでの語りと対極的な言葉が流れているはずだからである。

さて、ここでわたしは、この作品が、小川紳介から彭小蓮へとバトンタッチされ、最初の撮影から十数年の時間をかけて完成された経緯について書いておかねばならない。

小川と彭が初めて会ったのは、一九八八年のハワイ映画祭のときだったらしいが、親しく話をしたのは、その二年後のトリ映画祭においてだったという。そのとき小川は、彭の構想中の映画の話を知ると同時に、彼女のドキュメンタリー志向を感じ取ったようだ。そして一九九一年、小川紳介は、彭小蓮にドキュメンタリー映画を撮らせるべく、彼女を日本に招く。それが七月から八月にかけてのことだが、このあいだの四年間というのが、小川紳介が、そのあまりにも早すぎる晩年の情熱を傾けて、アジアの映画人との交流を深め、彼らのドキュメンタリー映画制作を支援しようと奮闘した時期だったことに、注意を促したい。すなわち、小川が彭と会ったハワイ映画祭の翌一九八九年には、第一回山形国際ドキュメンタリー映画祭が開かれたが、これは、小川紳介が世界のドキュメンタリー映画とその作り手や観客の相互交流の場を創出しようと奮闘して出来たものである。しかも、そ

こで彼がもっとも強く望んでいたのは、この映画祭が、ドキュメンタリー映画を志向するアジアの映画人をバックアップするような場になることであった。彭との関わりも、また彼が着手したまま、未完で終わったフィリピン花嫁のドキュメンタリーも、そのような活動の現れにほかならないだろう。

そして、かく申すわたしもまた、そのような小川の運動に巻き込まれた一人である。といっても、彭小蓮の『女人故事』を上映したときのシンポジウムの司会をしたり、彼女が企画したドキュメンタリーの資料集めの相談に乗った程度であるが。彼女は、九一年の夏に小川プロに滞在して、『私の日本の夢』という中国人留学生のドキュメンタリー映画の準備を進めるが、その前の三月にも、たぶんそれが初めてだったろうが、日本に来ているのだ。アジア映画祭といったかどうか、そ

の正式な名前は忘れたが、場所は、渋谷のシード・ホール、時は三月三十一日だったことは、はっきりと憶えている。監督を囲んで、台湾の批評家ベギー・チャオと田村正毅カメラマンとわたしだった。そのとき、会場の真ん中に座った小川紳介が、われわれの話を深めようとしたためか、あるいは観客を活気づけるためか、しきりに質問をするのが楽しかった。その後、彭小蓮に日本でドキュメンタリーを撮らせようという計画が、小川のなかで一挙に膨らんだものと思われる。そんな話を、何度か小川プロの杉並のスタジオで話し、実際に、七月に彭が来日してからは、中国人留学生の歴史を調べるために、彼女に同道して国会図書館などに行ったことがある。一方、彭小蓮も、そのときに初めて、集中的に小川紳介の作品を見たのだ。残念ながら、そのとき進めた企画は、作品として実るにはあまりにも多くの困難があって実現しなかったが、このときの経験は、彼女が映画作家として生きていくうえにおいて、少なからぬ糧となったはずである。

一九九一年十月、第二回山形国際ドキュメンタリー映画祭が開催され、一回目以上の賑わいを見せたが、そのときすでに病を得た小川紳介は参加できなかった。「ボクの代わりに見てきて下さい」という彼の言葉に、背中を押され、わたしはシンポジウムなどにも積極的に参加した。その報告がてら病院を見舞ったときは、まだ元気いっばいに見えた小川紳介は、しかし、翌年、二月七日に亡くなってしまった。そして、その六年後、小川の伴侶であり、戦友でもあった白石洋子は、一九八四年に撮られ、『1000年刻みの日時計』にどうしても入らないという理由でそのままになっていたフィルムを完成すべく、アメリカから上海と尋ねまわって彭小蓮を探しだし、彼女に残りの撮影と編集を委ねた。それは、小川紳介がこの地上に残した想いを実現させるための最善の選択であったろう。彭小蓮は、改めて小川紳介の作品を見直すとともに、その作業にかかったが、そんなある夜、古い村の像とともに、小川の声が聞こえてくる夢を見たという。彼女は、その小川の声に励まされて、この『満山紅柿』を作りあげたのだ。

柿の紅い実がたわわに実る美しい村のなかに、小川紳介の声が響く。いつも明るく元気なその声が……。

彭小蓮ら第2期スタッフ(1999)。紅柿の実る村を見おろす丘のうえで



■主催：上山名産紅干柿の記録映画を作る会、
プラネット映画資料図書館、シネ・ヌーヴォ
■協力：山形国際ドキュメンタリー映画祭
■会場とお問い合わせ
シネ・ヌーヴォ

地下鉄中央線「九条駅」6番出口下車徒歩3分
TEL.06-6582-1416
<http://terra.zone.ne.jp/cinenouveau/>

シネ・ヌーヴォ

2001年

11月3日(土)→16日(金)
モーニング&レイトロードショー

【時間】モーニング am.11:00 (終12:30)

レイト pm.8:50 (終10:20)

特別鑑賞券1400円好評発売中!!

当日 一般1700円、学生1400円、
高・中・小・シニア1000円

まんざんべにがき
満山紅柿
上山(かみの) 柿と人とのゆきかい

地下鉄中央線
九条駅

本町 6番出口

大阪港 アールビル ナルト 6番出口
シネ・ヌーヴォ パチンコ 商店街
大阪ドーム